平成 21 年度卒業論文

ジャパニーズロックバンドのブームとライフサイクル

文教大学　情報学部　経営情報学科

A6P21118　滑川　裕亮

ジャパニーズロックバンドのブームとライフサイクル

滑川　裕亮

研究概要

はじめに、それぞれ違った楽器を用いて音楽を奏でる複数人から成るグループをバンドという。そのバンドが演奏する音楽にはジャンルという種類が存在し、音楽の特徴によりいろいろな種類に分けることができる。その中に、日本だけに限らず世界の音楽シーンにはロックという音楽ジャンルが存在する。その日本のロックバンドは 1985 年から 1990 年代前半まで第一次ロックバンドブームを迎えたという。しかし、どのような事柄を根拠にブームを迎えたと述べているのか具体的な数値などで確認できた例は著者の知る限りではない。

そこで、本論文では、日本でロックバンドブームと言われた 1985 年から 90 年代前半までの間に本当にロックバンドブームが存在したのかを、ジャパニーズロック年間ランクイン数、ジャパニーズロックバンド CD リリース頻度、ジャパニーズロックバンドライブ数の 3 つの観点から定量化を測り、比較することにより確認できた。

その結果、確かに 1985 年から 90 年代前半にロックバンドブームが存在したが、そこまで広い範囲での時期ではなく、1988 年から 1990 年の間で存在したことを明らかにすることができた。それに加え、1996 年と 2005 年にもロックバンドブームが存在しており、実はロックバンドブームは過去 3 度発生していたことも示すことができた。

そして、次に、ジャパニーズロックバンドの動きをブームという観点からながめてきたが、今度はジャパニーズロックバンドを製品と捉え、バンド一つ一つのデビューから解散に至るまでのライフサイクルを、製品ライフサイクルに適応しながめてみた。

その結果、ほとんどのバンドが早い段階で自分たちにとって一番の人気を迎え、その年以降はどんどん人気が落ち、そのまま解散していくことが分かった。よって、バンド一つ一つにもほぼ共通のライフサイクルが存在することを明らかにすることができた。

目次

第1章　はじめに・・P1

第2章　ジャパニーズロックバンドについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P1

第3章　ロックバンドブームの定量化を測る手法と結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P2
3-1　ロックバンドブームを定量化する手法
3-1-1 ジャパニーズロック年間ランクイン数
3-1-2　ジャパニーズロックバンド CD リリース頻度
3-1-3　ジャパニーズロックバンドライブ数
3-2　定量化の結果

第4章　ジャパニーズロックバンドのライフサイクル・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P6
4-1　一般的な製品ライフサイクル
4-2　製品ライフサイクルの適応と結果

第5章　おわりに・・P10
5-1　結果のまとめ
5-2　今後の課題

謝辞 ・・P10

参考文献 ・・P11

付録 ・・・P12

ジャパニーズロックバンドのライフサイクル

滑川　裕亮

第 1 章　はじめに

2009 年現在、日本の音楽シーンにはパンク、J-POP、演歌、ジャズ、クラシック、ロックなど、これら以外にも様々なジャンルの音楽が存在する。しかし、ここでは、私が好むロックのジャンルに的を絞ってみたい。

そのロックの分野において、日本でロックバンドは 1985 年から 1990 年代前半に第一次ブームが生じていたという。しかし、どのようなことを根拠にブームを迎えていたかという具体的な数値などで確認できたことは著者の知る限りではない。そうなると、本当にロックバンドブームが存在したかということ自体疑わしくなる。

そこで、本論文では日本でロックバンドブームと言われた 1985 年から 90 年代前半までの間に本当にロックバンドブームが存在したのかを、ジャパニーズロック年間ランクイン数、ジャパニーズロックバンド CD リリース頻度、ジャパニーズロックバンドライブ数の 3 つの観点から定量化を測り比較することにより確認することにした。定量化をなぜこの 3 つにしたかというと、ブームとは需要と供給の関係から測れるのではないかと考え、需要を見るためにはジャパニーズロック年間ランクイン数、供給を見るにはジャパニーズロックバンド CD リリース頻度、ジャパニーズロックバンドライブ数が挙げられると考えたからである。CD の売上金額や売上枚数も定量化の対象としたいが、ネットの普及による音楽ダウンロードの増加により、過去と比較できないと判断したため、今回は定量化の対象外とする。ところで、定量化とは数値を用いて状況を表現することである[1]。

以上まではジャパニーズロックバンドの動きをブームという観点からみてきたが、今度はジャパニーズロックバンド一つ一つの動きをみてみたい。そこで、ジャパニーズロックバンドを一つの製品と捉えたとき、一般的な製品ライフサイクルの適応によりジャパニーズロックバンドのデビューから解散に至るまでに何か決まった動きがあるのか調べる。

本論文の構成は、まず次章でこの論文でキーワードとなる「ジャパニーズロックバンド」という言葉を「バンド」と「ロック」のそれぞれの言葉から説明する。次に、第 3 章でブームを測るための 3 つの定量化について説明し、実際に定量化し結果を述べる。そして、第 4 章ではバンドのライフサイクルについて調査し、最後に、第 5 章でこれまでの研究結果のまとめと今後の課題を示す。

第 2 章　ジャパニーズロックバンドについて

この章では、たいていの人が親しみ慣れていないと思われる、「ジャパニーズロックバン

ド」という言葉の概念について、「バンド」と「ロック」のそれぞれの概念を理解してもらった上で「ジャパニーズロックバンド」を説明する。

まずは、「バンド」という言葉を紹介する。バンドとは、音楽活動を目的とした楽器を演奏する集団のことで、取り扱う楽器に関してはギター、ドラム、ベース、またはキーボードなどを使用し、それらの演奏に合わせボーカルが歌う形式である。そして、メンバー構成に関しては 4 人以上である[2][3]。

次に「ロック」について説明したい。「ロック」とは音楽ジャンルの一つで、1950 年代に黒人音楽と白人音楽の融合で生まれたものである。「ロック」には大きく分けて 3 つの定義が存在する。しかし、本論文で対象とするのは日本のロックバンドなので、ここでは日本で浸透している定義について述べる。

「ロック」のジャンルに分けるとき、基準となるものが 3 つある。まず一つ目として、曲のリズムが 8 ビート主体であること。そして二つ目に、楽器の音についてである。ギターやベースなどの弦楽器は特殊な機械を使って歪ませた音色を使う。そして最後に、自ら作曲し、それを自ら演奏するように自主性で成り立つものである[2][3]。

「バンド」と「ロック」の概念を踏まえた上で、「ジャパニーズロックバンド」とは、読んで字の如く、ロックの曲を扱う日本のバンドのことである。具体的に最も売れた「ジャパニーズロックバンド」を年代別に挙げると、まず 80 年代では BOOWY、90 年代では L'Arc en Ciel 、00 年代では ORANGE RANGE である。

第 3 章　ブームを定量化する手法と結果

第 2 章では本論文の中心となるジャパニーズロックバンドについて説明した。そして、ここからが本題である。この章では、どのような手法でロックバンドブームを定量化するか説明する。そして、実際に定量化し、結果をみてみる。

3-1　ロックバンドブームを定量化する手法

ここではロックバンドブームを測るために 3 つの手法を用いて定量化する。順に追っていくと、ジャパニーズロック年間ランクイン数、ジャパニーズロックバンド CD リリース頻度、ジャパニーズロックバンドライブ数である。これらの定量化から数値の変化を分析しブームがあったのかを調査する。

3-1-1　ジャパニーズロックバンド年間ランクイン数

ここでは、ジャパニーズロックバンド自体にどれほどの需要があり、また、その需要が 1985 年から 2008 年の間にどのような変化が生じてきたか調査する。

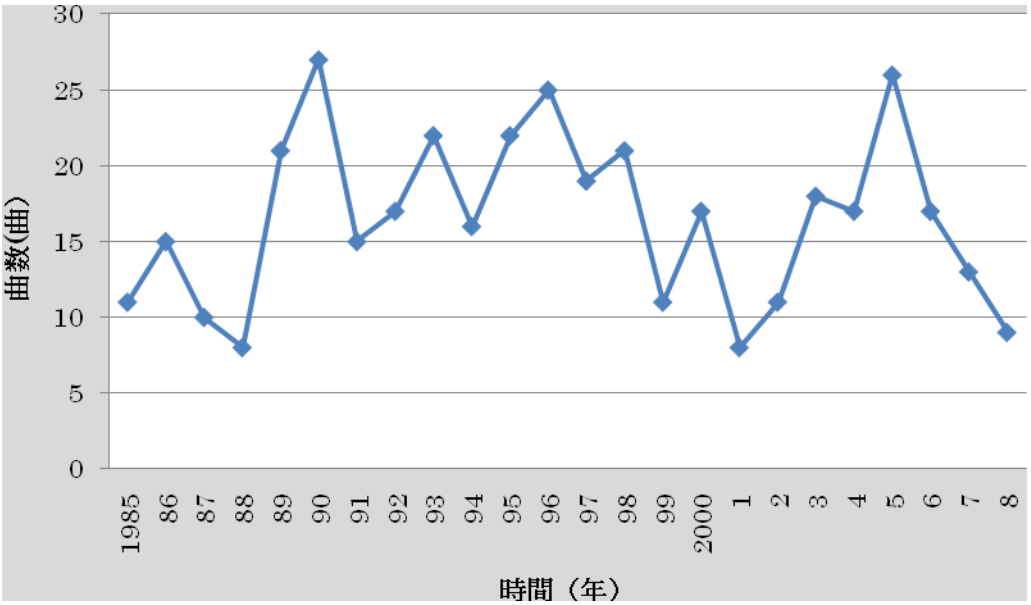

図 1　ジャパニーズロック年間ランクイン数

図 1 は日本の年間ヒットチャート 100 位以内にジャパニーズロックが何曲ランクインしているかを示している。これは、「THE HITCHART NOW AND THEN」に記載されていた年間別ヒットチャート 100 にジャパニーズロックが何曲ランクインしていたのかを著者がカウントし、グラフ化したものである。図 1 のグラフを見ると、1985 年からバンドブームに入っていたというが、このグラフを見る限り、その頃は特にジャパニーズロックソングが売れていたわけではなく、1990 年の一年間だけではなかったのだろうか。そして、1990 年と近い大きな上昇が 1996 年と 2005 年にも存在する。

3-1-2　ジャパニーズロックバンド CD リリース頻度

CD にはシングルとアルバムの二種類が存在する。基本的にアーティストはシングルをメインにリリースするが、なかにはアルバムをメインにリリースするアーティストもいるようだ。よって、シングルとアルバムの統計を別々にとるとバラつきが生じてしまうため、ここではシングルとアルバムを同じ CD として捉える。そして、CD リリース頻度の調査のために対象としたバンドは、3-1-1 でランクインしたジャパニーズロックを手掛けた 64 組のジャパニーズロックバンドである。具体的な対象ロックバンドのリストは付録を参考にしてほしい。

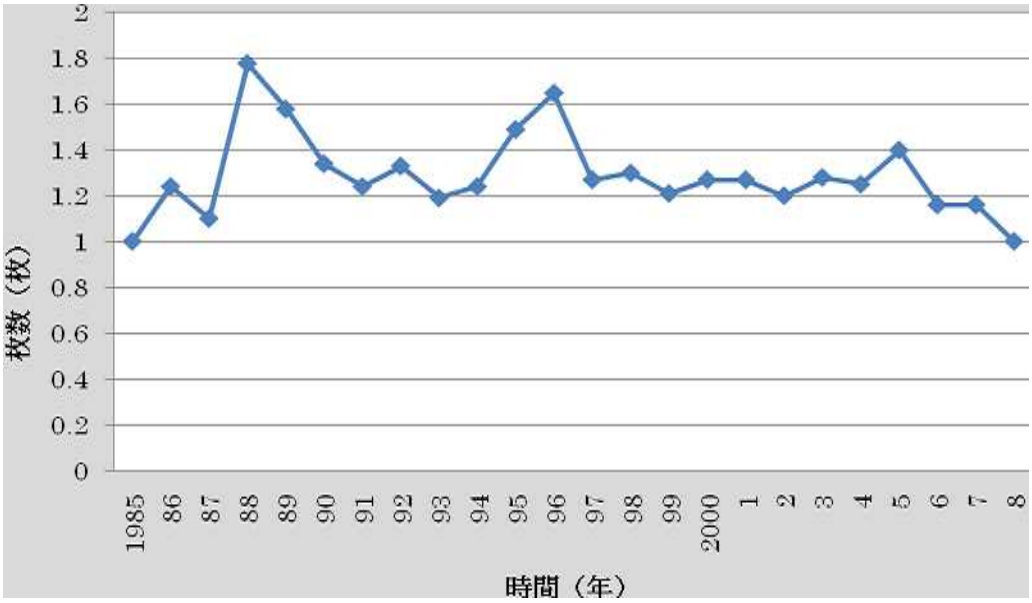

図 2　ジャパニーズロックバンド CD リリース年間平均枚数

図 2 はシングル CD とアルバム CD を同じものと捉えたとき、ジャパニーズロックバンドが年間に平均何枚の CD をリリースするのかを示している。そして、この図 2 はジャパニーズロックバンドそれぞれのオフィシャル HP や、ファンクラブにより作られたアンオフィシャル HP に記載されている記録をもとに著者が作成したものである。

まず、ロックバンドブームである 1985 年から 90 年代前半に注目して見てみると、図 1 のジャパニーズロック年間ランクイン数のグラフ同様、1985 年から 90 年代前半の間で一番のピークを迎えている。

次に、ブーム以降である 90 年代半ば以降をみてみると、1996 年でまた目立つ上昇を見せているが、翌年からまた減少し、いくらか低い位置で安定した数値を示している。2005 年でわずかだがまた上昇を見せるが、上昇後すぐに右下がりの傾向になっている。

最後に全体的に比較してみると、CD の方ではロックバンドブーム時期中である 1988 年と、ブーム中ではない 2008 年とを比較すると 2 倍近くの差が生じていることが分かる。

3-1-3　ジャパニーズロックバンド年間ライブ数

ここ数年でネットの普及が急激に増え、それに伴いネットによる音楽配信や違法ダウンロードも増えてきている。よって CD が売れないことによりジャパニーズロックバンドのなかには CD をリリースせず、ライブを中心に活動しているバンドが存在すると予想される。そこで、ここではジャパニーズロックバンドが年間に平均何本のライブをするかに関して調査する。

調査にあたり、ばらつきを抑えるためにジャパニーズロックバンド CD リリース頻度を

みた 64 バンド全てのライブデータを収集することが一番望ましいが、全ての過去の詳しいライブデータは入手できなかった。そこで、定量化を測るにはとても少なくなってしまうが、唯一オフィシャル HP に過去のライブ記録が残っていた以下 7 組のバンドでジャパニーズロックバンドの年間ライブ数を定量化する。

- L'Arc en Ciel
- TUBE
- ORANGE RANGE
- BUCK-TICK
- Janne Da Arc
- RADWIMPS
- サザンオールスターズ

以上 7 組のバンドを対象に年間ライブ数を定量化し変化をみる。そして、その 7 つのバンドの年間ライブ数を示したものが図 3 のグラフである。

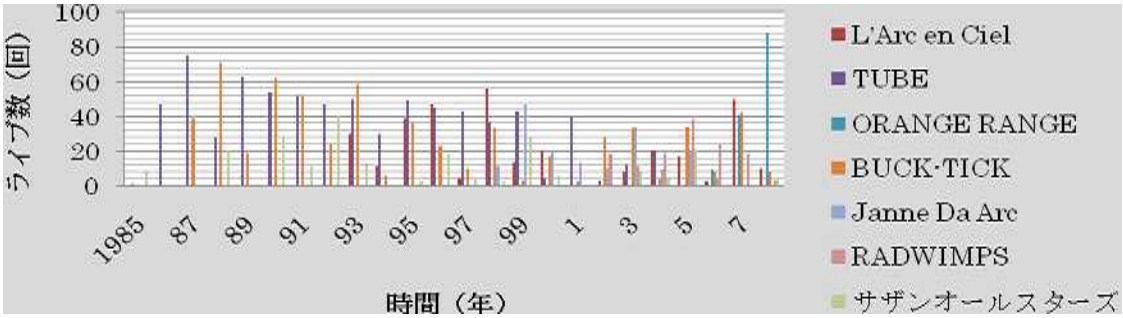

図 3　ジャパニーズロックバンド別年間ライブ数

図 3 だけでは年間の増減が分かりにくいので、これを年間ごとの平均値を求めたグラフにする。それが図 4 である。

図 4　ジャパニーズロックバンド年間平均ライブ数

図 4 を見ると、第一次ロックバンドブーム中とされる 1985 年から 90 年代前半の間で 1990 年に全体を通しての一番大きな数値が見られる。しかし、それからは減少傾向になり、1996 年でまた大きな上昇を見せるが翌年からまた右下がりの減少傾向になっている。

3-2　定量化の結果

ここでは、ブームが本当にあったかどうかを 3-1 で定量化した 3 つのグラフを比較し、分析することで明らかにする。

図 1、図 2、図 4 の以上 3 つのグラフの比較で注目して欲しい点が 4 つある。まず一つ目は、ロックバンドブームであるとされる 1985 年から 90 年代前半の期間である。図 1、図 2、図 4 の 3 つのグラフを同時に見比べてみると、どのグラフでもその期間中に全体を通して最高値を出している。やはりロックバンドブームはこの期間に存在していたようだが、図 1、2 では両方とも 1990 年にピークがあり、図 4 では 1988 年にピークが存在することから、日本のロックバンドブームは 1985 年から 90 年代前半という広い範囲ではなく、1988 年から 1990 年の三年間のみで存在していたのではないだろうか。

二つ目に、1996 年に注目して欲しい。ここで比較対象としている 3 つのグラフ全てが共通に 1996 年で高い数値を出し、翌年から右下がりの減少傾向になっていることである。このことから、2 度目のロックバンドブームが 1996 年に存在していたことを明らかにすることができた。

三つ目に、2005 年である。図 4 ではデータ不足からはっきりとしたことは言えないが、図 1、2 共に 2005 年で 3 度目の目立つ上昇を見せ、2006 年からまた減少している。そして、これら 2 つのグラフに連動し、図 4 でもかすかではあるが 2005 年で同じく一度上昇を見せたあとまた減少している。

以上のことから、日本でロックバンドブームは 1988 年から 1990 年の三年間、1996 年、2005 年の計 3 回存在していたことを示すことができた。

そして、最後の注目点として、これら 3 度のロックバンドブームがほぼ等間隔で発生していることである。このような結果になった背景までは時間の都合により調査はできないが、仮説を起てるなら、これは、メディアの影響力により私たち民衆が錯覚を起こし、それが需要を延ばす要因となっているのではないかと考える。それはどういうことかというと、音楽業界で今年はこのジャンルの音楽を売り出そうと計画を立て、メディアによってそのジャンルに力を入れることにより、私たちはあたかもそのジャンルの音楽やバンド、またはグループが流行っているのではないかと錯覚を起こし、需要をある程度操られているのではないだろうか。

第 4 章　ジャパニーズロックバンドのライフサイクル

これまでの調査で日本のロックバンドブームを示すことができ、更に、ブームにほぼ等

間隔の周期があることも明らかにできた。では、次に、この章では一つ一つのバンドにも決まった周期があるかどうかについて、バンドを製品に置き換えることによって製品ライフサイクルの適応によりジャパニーズロックバンドのライフサイクルを測る。

4-1　一般的な製品ライフサイクル

まず初めに、製品ライフサイクルの概念について説明する。製品ライフサイクルとは製品には寿命がることを前提とした場合、市場に登場してから退場するまでの間を指し、導入期、成長期、成熟期、衰退期の 4 段階から構成される。

製品サイクルのグラフは売上げと時間の関係で示すもので、この関係は縦軸に売上、横軸に時間をとることで山型の曲線で表わすことができる[4]。

4-2　製品ライフサイクルの適応と結果

バンドを製品と考えたとき、4-1 で説明した製品ライフサイクルが適応でき、バンドのライフサイクルを測ることができるか調査し、分析する。

初めに、ここではどのようなジャパニーズロックバンドを調査対象とするかについて説明する。対象とする期間はこれまで同様 1985 年から 2008 年までである。しかし、ライフサイクルをみるということなので、その期間内にデビューから解散までに至ったバンドとする。そして、なおかつ、ジャパニーズロック年間ランクイン回数で一年間に自分たちの曲が 3 曲以上ランクインしたジャパニーズロックバンドとする。その理由として、デビューから解散までの間にどれ程需要を満たしたかの波をみたいので、そこで年間ランクイン数が 0 や 1 だらけだと波の変化が小さく、特徴が分かりにくいためである。以上の条件のもと選出された以下の 8 組のバンドを対象とする。

- プリンセス・プリンセス
- WANDS
- ＬＩＮＤＢＥＲＧ
- T-BOLAN
- シャ乱Q
- ＴＨＥ　ＹＥＬＬＯＷ MONKYE
- X
- ロードオブメジャー

では、実際にそれらのバンドのオフィシャル HP またはアンオフィシャル HP より記載されている活動期間と、付録に記載されている年間ヒットチャートランクイン数をもとに製品ライフサイクルのグラフに当てはめてみる。ここでは縦軸に年間ランクイン数をとり、横軸には活動期間をとっている。

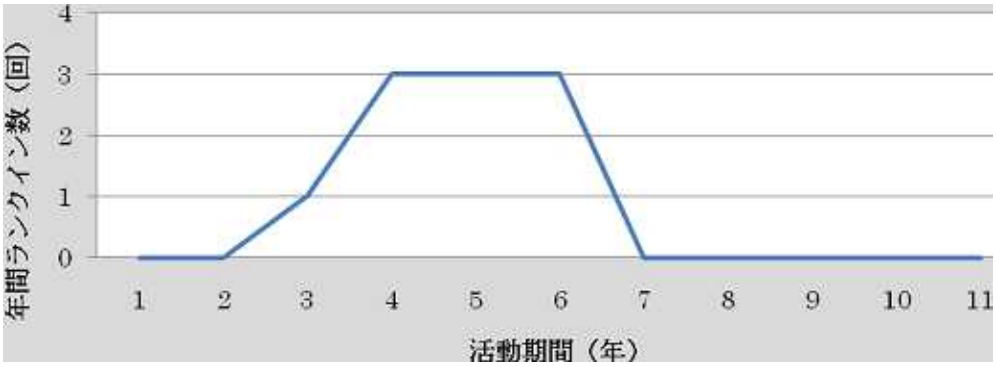

図 5　プリンセス・プリンセス

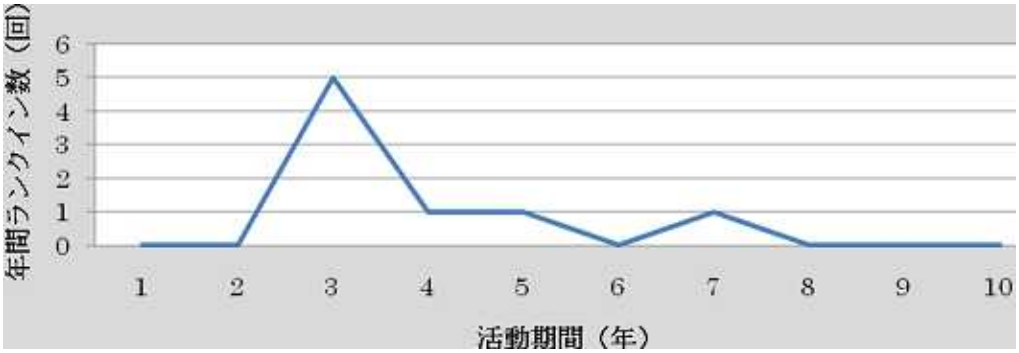

図 6　WANDS

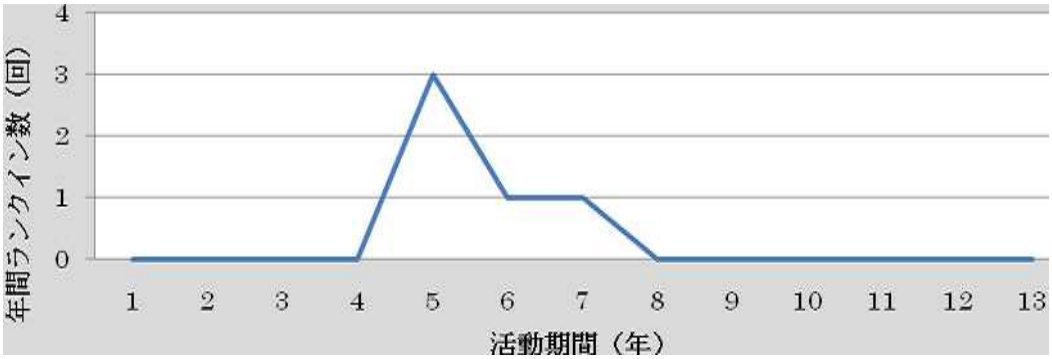

図 7　THE　YELLOW　MONKYE

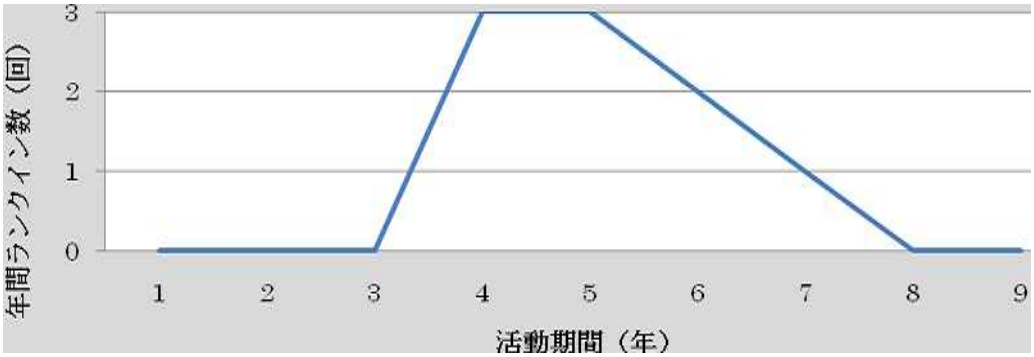

図 8　シャ乱 Q

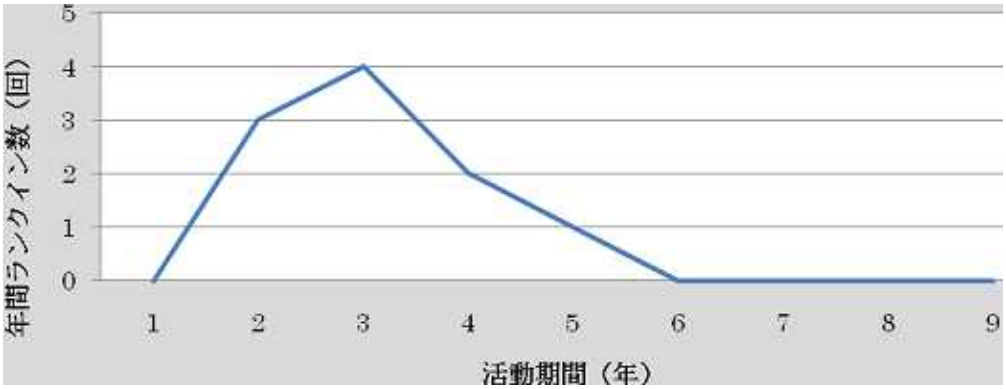

図 9　T-BOLAN

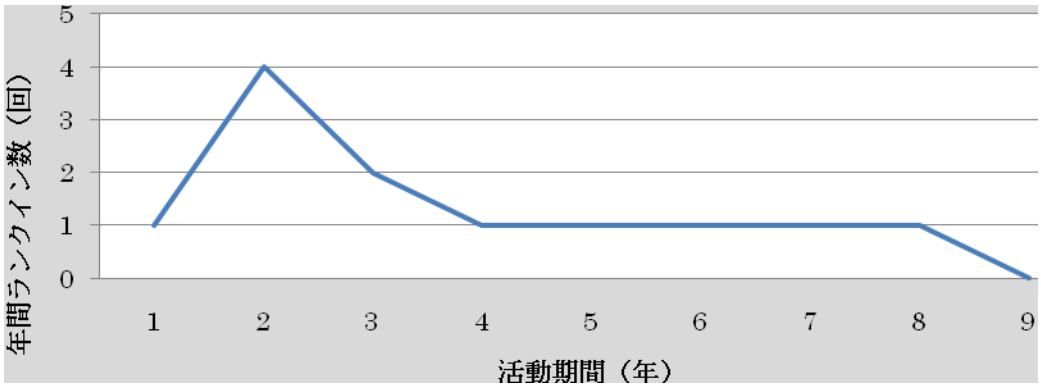

図 10　X

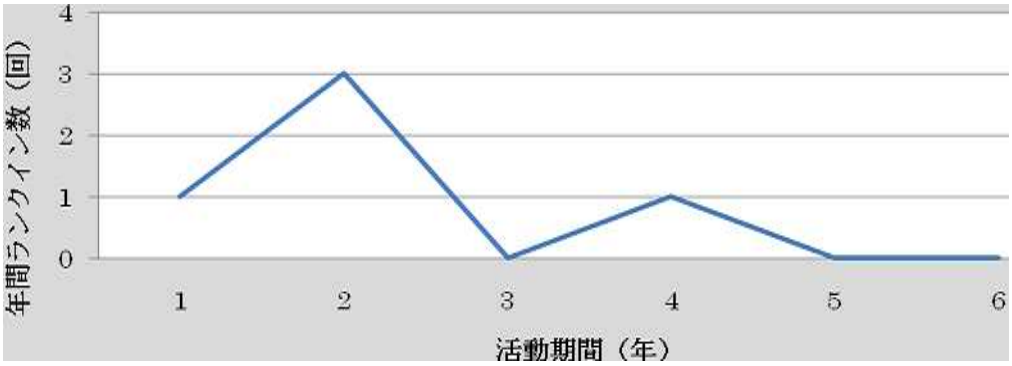

図 11　ロードオブメジャー

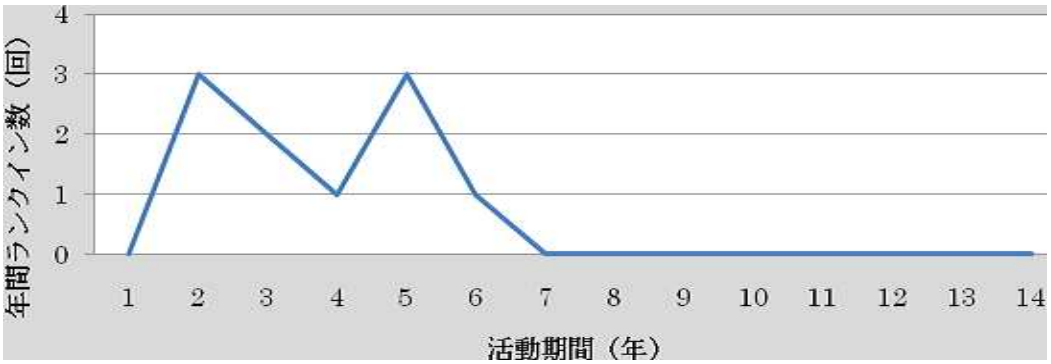

図 12　LINDBERG

製品ライフサイクルを適応した結果、図 12 の LINDBERG 以外、全てのジャパニーズロックバンドは急激な速さで人気のピークを迎え、一度ピークを迎えるとあとはそのまま右下がり傾向になり、高い数値を出せないまま解散に至るという結果になった。そして、全てのバンドに共通して言えることは、ランクイン回数 0 回をもって解散しているということである。やはり、売れなくなることがバンド解散に繋がる大きな理由となっているのだろう。

第 5 章　おわりに

5-1　結果のまとめ

ジャパニーズロック年間ランクイン数、ジャパニーズロックバンド CD リリース頻度、ジャパニーズロックバンドライブ数を定量化することにより、確かに 1985 年から 90 年代前半にロックバンドブームは存在したが、そこまで広い範囲での時期ではなく、1988 年から 1990 年の間で存在したことを明らかにすることができた。それに加え、1996 年と 2005 年にもロックバンドブームが存在しており、実はロックバンドブームは過去三度発生して

いたことも示すことができた。

そして、ジャパニーズロックバンドのライフサイクルについては、ほとんどのバンドが早い段階で自分たちにとって一番の人気を迎え、その年以降はどんどん人気が落ち、そのまま解散していくことが分かった。よって、バンド一つ一つにもほぼ共通のライフサイクルが存在することを明らかにすることができた。

5-2　今後の課題

なぜ前述した結果が観察されたのかの背景に関するさらなる追求や、ブームの周期現象に関する仮説への切り込みには本研究ではカバーできなかった。そこで、それらを今後の課題としたい。

謝辞

この研究を進めるにあたり、何度も相談にのって頂きたくさんのアドバイスをくださった担当教員の根本俊男教授や、同じゼミ生やＯＢの方々に感謝致します。ありがとうございました。

参考文献

[1] 佐藤郁哉『定性データ分析入門』新曜社（2006 年）

[2] 井上貴子、森川卓夫、室田尚子、小泉恭子『ヴィジュアル系の時代』青弓社（2003 年）

[3] 南田勝也『ロックミュージック社会学』青弓社（2001 年）

[4] 田村正紀『マーケティング論』放送大学教育振興会（1999 年）

付録

付表：バンド別年間チャートランクイン数

バンド名	1985	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	2000	1	2	3	4	5	6	7	8
チェッカーズ	1	1	0	2	1	1	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
サザンオールスターズ	1	0	0	1	1	0	2	0	0	0	1	3	1	0	1	1	0	0	2	1	0	0	0	0
THE 虎舞流	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
J-WALK	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
安全地帯	2	1	2	0	1	1	1	0	1	2	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
BOOWY	1	2	0																					
レベッカ	0	1	0	2	1	0	0																	
BAKUFU-SLUMP	0	1	0	2	0	1	0	0	0	1														
THE TIMERS	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0		
HOUND DOG	1	0	2	1	0	0	0	0	1	0	0	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0		
男闘呼組	0	0	0	1	3	1	1	0	0															
ECHOES	0	0	0	0	0	0	1																	
THE BLUE HEARTS	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0													
TUBE	1	2	2	1	1	1	2	2	1	3	2	1	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
プリンセス・プリンセス		0	0	1	3	3	3	0	0	0	0	0												
KUWATA BAND		4	0																					
ユニコーン			0	0	1	1	0	0	0															
ZIGGY			0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
PERSONZ			0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
BUCK-TICK			0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
GO-BANG'S				0	0	1	0	0	0	0														
JUN SKY WALKER(S)				0	1	1	1	1	1	0	0	0	0											
エレファントカシマシ				0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
THE TIMERS					1	0	0	0	0	0	0	0	0	0										
X					1	4	2	1	1	1	1	1	0											
LINDBERG					0	3	2	1	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0						
JITTERIN'JINN					0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
THE BOOM					0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
PINK SAPPHIRE						1	0	0	0	0	0													
黒夢							0	0	0	0	0	0	1	1	0									
T-BOLAN							0	3	4	2	1	0	0	0	0									
WANDS							0	0	5	1	1	0	1	0	0	0								
オリジナル・ラヴ							0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
スピッツ							0	0	0	0	2	3	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0
BAKU								1	0	0														
LUNA SEA								0	0	1	1	1	0	2	0	1								
シャ乱Q								0	0	0	3	3	2	1	0	0								
THE YELLOW MONKEY								0	0	0	0	3	1	1	0	0	0	0	0	0				
ウルフルズ								0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
Mr. Children								0	0	2	4	2	1	2	1	2	2	3	1	2	1	1	1	2
JUDY AND MARY									0	0	1	2	2	1	0	0	1							
FIELD OF VIEW										0	2	0	0	0	0	0	0	0						
ラルク										0	0	0	1	7	4	2	1	0	0	3	3	1	1	2
Whiteberry										0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0				
TOKIO										1	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	0	1	0
SIAM SHADE											0	0	0	1	0	0	0	0						
THE HIGH-LOWS											0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0			
MOON CHAILD												1	0	0	0									
PENICILIN												0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
SHAZNA													1	1	0	0								
Dragon Ash													0	0	3	1	0	2	0	0	1	0	0	0
キンモクセイ														0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
BUMP OF CHCKEN														0	0	0	1	0	2	1	2	1	1	0
ジャンヌダルク														0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0
175R														0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0
SADS															0	0	0	1	0					
SHAKARABBITS															0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
氣志團																	0	1	0	0	1	0	0	0
ロードオブメジャー																		1	3	0	1	0	0	
ORANGE RANGE																		0	2	4	5	1	0	1
FLOW																			1	1	1	0	1	0
レミオロメン																			0	0	1	0	1	0
HIGH and MIGHTY COLOR																					1	0	0	0
RADWIMPS																					0	0	0	1
Aqua Timez																						0	1	0

（出典：THE HITCHART NOW AND THEN）